薄明

太宰治

東京の三鷹（みたか）の住居を爆弾でこわされたので、妻の里の甲府（こうふ）へ、一家は移住した。甲府の妻の実家には、妻の妹がひとりで住んでいたのである。

昭和二十年の四月上旬であった。聯合機（れんごうき）は甲府の空をたびたび通過するが、しかし、投弾はほとんど一度も無かった。まちの雰囲気（ふんいき）も東京ほど戦場化してはいなかった。私たちも久し振りで防空服装を解いて寝る事が出来た。私は三十七になっていた。妻は三十四、長女は五つ、長男はその前年の八月に生れたばかりの二歳である。これまでの私たちの生活も決して楽ではなかったが、とにかく皆、たいした病気も怪我（けが）もせず

に生きて来た。せっかくいままで苦労を忍んで生きて来たのだから、なおしばらく生きのびて世の成り行きを見たいものだという気持は私にもあった。しかし、それよりも、女房や子供がさきにやられて、自分ひとり後に残されてはかなわんという気持のほうが強かった。それは、思うさえ、やりきれない事である。とにかく妻子を死なせてはならない。そのために万全の措置（そち）を講じなければならぬ。しかし、私には金が無かった。たまに少しまとまったお金がはいる事があっても、私はすぐにそのお金でもってお酒を飲んでしまうのである。私には飲酒癖という非常な欠点があった

のである。その頃のお酒はなかなか高価なものであったが、しかし、私は友人の訪問などを受けると、やっぱり昔のように一緒にそわそわ外出して多量のお酒を飲まずには居られなかった。これでは、万全の措置も何もあったものでない。多くの人々がその家族を遠い田舎（いなか）に、いち早く疎開（そかい）させているのを、うらやましく思いながら、私は金が無いのと、もう一つは気不精から、いつまでも東京の三鷹で愚図々々（ぐずぐず）しているうちに、とうとう爆弾の見舞いを受け、さすがにもう東京にいるのがイヤになって、一家は妻の里へ移転した。そうして、全く百日振りくらいで防空服装を解いて寝て、

まあこれで、ここ暫(しばら)くは寒い夜中に子供たちを起して防空壕(ぼうくうごう)に飛び込むような事はしなくてすむと思うと、これからさきに於(お)いてまだまだ様々の困難があるだろう事は予想せられてはいても、とにかくちょっと安堵(あんど)の溜息(ためいき)をもらしたという形であったのである。

しかし、私たちは既に「自分の家」を喪失している家族である。何かと勝手の違う事が多かった。自分もいままで人並に、生活の苦労はして来たつもりであるが、小さい子供ふたりを連れて、いかに妻の里という身近かな親戚(しんせき)とは言え、ひとの家に寄宿するという事になればまた、これまで経験した事の無かったような、

いろいろの特殊な苦労も味った。甲府の妻の里では、父も母も亡くなり、姉たちは嫁ぎ、一ばん下の子は男で、それが戸主になっているのだが、その二、三年前に大学を出てすぐ海軍へ行き、いま甲府の家に残っている者は、その男の子のすぐ上の姉で、私の妻のすぐの妹という具合いになっている二十六だか七だかの娘がひとり住んでいるきりであった。その娘が、海軍に行っている男の子と手紙で甲府の家の事に就いてしょっちゅうこまごまと相談し合っている様子であった。私はその二人の義兄という事になっているわけだが、しかし、義兄なんてものは、その家に就いて何の

実権のあるわけはない。実権どころか、私は結婚以来、ここの家族一同には、いろいろと厄介（やっかい）をかけている。つまり、たのみにならぬ男なのだから、義妹や義弟たちから、その家の事に就いて何の相談にもあずからぬのは、実に当然の事であって、また私にしても、そんな甲府の家の財産やら何やらには、さっぱり興味も持てないので、そこはお互いにいい按配（あんばい）の事であった。
しかし、二十六だったか七だったか、八か、あらたまって尋ねて聞いた事も無いので、はっきりした事は覚えていないが、とにかくまあ、その娘ひとりであずかっている家に、三十七の義兄と三十四の姉が子供を二人

も連れてどやどやと乗り込んで、そうしてその娘と遠方の若い海軍とをいい加減にだまして、いつのまにやらその家の財産にも云々（うんぬん）、などと、まさかそれほど邪推するひとも有るまいが、何にしても、こっちは年上なのだから、無意識の裡（うち）にも、彼等のプライドを、もしや蹂躙（じゅうりん）するという事になってやしないだろうか、とその頃の実感で言えば、まるで、柔い苔（こけ）の一ぱい生（は）えている庭を、その庭の苔を踏むまいとして、飛び石伝いに、ひょいひょいとずいぶん気をつけて歩いているような姿であった。もっと、としをとって、世間の苦労も大いに積んで来た男がひとりこの家にいたら、

私たちも、もう少し気楽なのではあるまいか、とさえ思われた。ネガチヴの気遣いも、骨の折れるものである。私は、その家の裏庭に面した六畳間を私の仕事部屋兼寝室として借り、それからもう一間、仏壇のある六畳間を妻子の寝室という事にしてもらって、普通の間代（まだい）を定め、食費その他の事に就いても妻の里のほうで損をしないように充分に気をつけ、また、私に来客のある時には、その家の客間を使わずに、私の仕事部屋のほうにとおすという事にしていたのであるが、しかし、私は酒飲みであり、また東京から遊びに来るお客もちょいちょいあるし、里の権利を大いに重んずる

つもりでいながら、つい申しわけのない結果になりがちの事が多かった。義妹も、かえって私たちには遠慮をして、ずいぶん子供たちの世話もしてくれて、いちども、いやな正面衝突など無かったが、しかし、私たちには「家を喪(うしな)った」者のヒガミもあるのか、やっぱり何か、薄氷を踏んで歩いているような気遣いがあった。結局、里のほうにしても、また私たちにしても、どうもこの疎開という事は、双方で瘦(や)せるくらいに気骨の折れるものだという事に帰着するようである。しかし、それでも私たちの場合は、疎開人として最も具合いのよかったほうらしいのだから、他の疎開人の身

の上は推(お)して知るべきである。

「疎開は、するな。家がまる焼けになる迄(まで)は、東京にねばっているほうがよい。」

と私はその頃、東京で家族全部と共に残留している或る親しい友人に書き送ってやった事もあった。

　甲府へ来たのは、四月の、まだ薄ら寒い頃で、桜も東京よりかなりおくれ、やっとちらほら咲きはじめたばかりであったが、それから、五月、六月、そろそろ盆地特有のあの炎熱がやって来て、石榴(ざくろ)の濃緑の葉が油光りして、そうしてその真紅の花が烈日を受けてかっと咲き、葡萄棚(ぶどうだな)の青い小粒の実も、日ましにふく

らみ、少しずつ重たげな長い総（ふさ）を形成しかけていた時に、にわかに甲府市中が騒然となった。攻撃が、中小都市に向けられ、甲府も、もうすぐ焼き払われる事にきまった、という噂（うわさ）が全市に満ちた。市民はすべて浮足立ち、家財道具を車に積んで家族を引き連れ山の奥へ逃げて行き、その足音やら車の音が深夜でも絶える事なく耳についた。それはもう甲府も、いつかはやられるだろうと覚悟していたが、しかし、久し振りで防空服装を解いて寝て、わずかに安堵（あんど）するかせぬうちに、またもや身ごしらえして車を引き、妻子を連れて山の中の知らない家の厄介（やっかい）になりに再疎開して行くの

は、何とも、どうも、大儀であった。

頑張（がんば）って見ようじゃないか。焼夷弾（しょういだん）を落しはじめたら、女房は小さい子を背負い、そうして上の女の子はもう五つだし、ひとりでどんどん歩けるのだから、女房はこれの手をひいて三人は、とにかく町はずれの田圃（たんぼ）へ逃げる。あとは私と義妹が居残って、出来る限り火勢と戦い、この家を守ろうじゃないか。焼けたら、焼けたで、皆して力を合せ、焼跡に小屋でも建てて頑張って見ようじゃないか。

私からそれを言い出したのであったが、とにかく一家はそのつもりになって、穴を掘って食料を埋めたり、

また鍋釜茶碗（なべかまちゃわん）の類を一揃（そろい）、それから傘（かさ）や履物（はきもの）や化粧品や鏡や、針や糸や、とにかく家が丸焼けになっても浅間（あさま）しい真似（まね）をせずともすむように、最少限度の必需品を土の中に埋めて置く事にした。

「これも埋めて下さい。」

と五つの女の子が、自分の赤い下駄を持って来た。

「ああ、よし、よし。」と言って、それを受取って穴の片隅（かたすみ）にねじ込みながら、ふと誰かを埋葬しているような気がした。

「やっと、私たちの一家も、気がそろって来たわねえ。」

と義妹は言った。

それは、義妹にとって、謂わば滅亡前夜の、あの不思議な幽かな幸福感であったかも知れない。それから四、五日も経たぬうちに、家が全焼した。私の予感よりも一箇月早く襲来した。

　その十日ほど前から、子供が二人そろって眼を悪くして医者にかよっていた。流行性結膜炎である。下の男の子はそれほどでも無かったが、上の女の子は日ましにひどくなるばかりで、その襲来の二、三日前から完全な失明状態にはいった。眼蓋が腫れて顔つきが変ってしまい、そうしてその眼蓋を手で無理にこじあけて中の眼球を調べて見ると、ほとんど死魚の眼のよ

うに糜爛（びらん）していた。これはひょっとしたら、単純な結膜炎では無く、悪質の黴菌（ばいきん）にでも犯されて、もはや手おくれになってしまっているのではあるまいかとさえ思われ、別の医者にも診察してもらったが、やはり結膜炎という事で、全快までには相当永くかかるが、絶望では無いと言う。しかし、医者の見そこないは、よくある事だ。いや、見そこないのほうが多い。私は医者の言う事はあまり信用しない性質である。

　早く眼が見えるようになるといい。私は酒を飲んでも酔えなかった。外で飲んで、家へ帰る途中で吐いた事もある。そうして、路傍で、冗談でなく合掌（がっしょう）した。

家へ帰ったら、あの子の眼が、あいていますようにと祈った。家へ帰ると子供の無心の歌声が聞える。ああ、よかった、眼があいたかと部屋に飛び込んでみると、子供は薄暗い部屋のまんなかにしょんぼり立っていて、うつむいて歌を歌っている。

　とても見て居られなかった。私はそのまま、また外へ出る。何もかも私ひとりの責任のような気がしてならない。私が貧乏の酒くらいだから、子供もめくらになったのだ。これまで、ちゃんとした良市民の生活をしていたなら、こんな不幸も起らずにすんだのかも知れない。親の因果（いんが）が子に報（むく）い、というやつだ。罰（ばち）だ。

もし、この子がこれっきり一生、眼があかなかったならば、もう自分は文学も名誉も何も要(い)らない、みんな捨ててしまって、この子の傍にばかりついていてやろう、とも思った。

「坊やのアンヨはどこだ？　オテテはどこだ？」

などと機嫌(きげん)のいい時には、手さぐりで下の男の子と遊んでいる様を見て、もし、こんな状態のままで来襲があったら、と思うと、また慄然(りつぜん)とした。妻は下の男の子を背負い、私がこの子を背負って逃げるより他しかたが無いだろうが、しかし、そうすると、義妹ひとりで、この家を守るなどは、とても出来る事でない。

義妹もやはり逃げなければならぬだろう。この家は、焼けるままに放棄するという事になる。さらにまた聯合機（れんごうき）の攻撃はこれまでの東京の例で見ても、まず甲府全市にわたるものと覚悟しなければならぬ。この子のかよっている医院も、きっと焼けるに違いない、また他の病院も、とにかく甲府には、医者が無くなる。そうすると、この子は失明のままで、どうなるのだろう。万事、休す。

「なんでもいい。とにかく、もう一月は待ってくれてもよさそうに思うがねえ。」

と私は夕食の時、笑いながら家の者に言ったその夜、

空襲警報と同時に、れいの爆音が大きく聞えて、たちまち四辺が明るくなった。焼夷弾攻撃がはじまったのだ。ガチャンガチャンと妹が縁先の小さい池に食器類を投入する音が聞えた。

　まさに、最悪の時期に襲来したのである。私は失明の子供を背負った。妻は下の男の子を背負い、共に敷蒲団（しきぶとん）一枚ずつかかえて走った。途中二、三度、路傍のどぶに退避し、十丁（ちょう）ほど行ってやっと田圃に出た。麦を刈り取ったばかりの畑に蒲団をしいて、腰をおろし、一息ついていたら、ざっと頭の真上から火の雨が降って来た。

「蒲団をかぶれ！」

私は妻に言って、自分も子供を背負ったまま蒲団をかぶって畑に伏した。直撃弾を受けたら痛いだろうなと思った。

直撃弾は、あたらなかった。蒲団をはねのけて上半身を起してみると、自分の身のまわりは火の海である。

「おい、起きて消せ！　消せ！」と私は妻ばかりでなく、その附近に伏している人たち皆に聞えるようにとさらに大声で叫び、かぶっていた蒲団で、周囲の火焔を片端からおさえて行った。火は面白いほど、よく消える。背中の子供は、目が見えなくても、何かただ

ならぬ気配を感じているのか、泣きもせず黙って父の肩にしがみついている。

「怪我(けが)は無かったか。」

だいたい火焔を鎮(しず)めてから私は妻の方に歩み寄って尋ねた。

「ええ、」と静かに答えて、「これぐらいの事ですむのでしたらいいけど。」

妻には、焼夷弾よりも爆弾のほうが、苦手らしかった。

畑の他の場所へ移って、一休みしていると、またも頭の真上から火の雨。へんな言い方だが、生きている

人間には何か神性の一かけらでもあるのか、私たちばかりではなく、その畑に逃げて来ている人たち全部、誰もやけどをしなかった。おのおのが、その身辺の地上で焔（も）えているベトベトした油のかたまりのようなものに蒲団やら、土やらをかぶせて退治して、また一休み。

妹は、あすの私たちの食料を心配して、甲府市から一里半もある山の奥の遠縁の家へ、出発した。私たち親子四人は、一枚の敷蒲団を地べたに敷き、もう一枚の掛蒲団は皆でかぶって、まあここに踏みとどまっている事にした。さすがに私は疲れた。子供を背負って

この上またあちこち逃げまわるのは、いやになっていた。子供たちはもう蒲団の上におろされて、安眠している。親たちは、ただぼんやり、甲府市の炎上を眺めている。飛行機の、あの爆音も、もうあまり聞えなくなった。

「そろそろ、おしまいでしょうね。」

「そうだろう。いや、もうたくさんだ。」

「うちも焼けたでしょうね。」

「さあ、どうだかな？　残っているといいがねえ。」

所詮（しょせん）だめとは思っていても、しかしまた、ひょっとして、奇蹟的に家が残っていたらまあどんなに嬉（うれ）しか

ろうとも思うのだ。
「だめだろうよ。」
「そうでしょうね。」
しかし、心では一縷（いちる）の望みを捨て切れなかった。
すぐ、眼の前の一軒の農家がめらめら燃えている。燃えはじめてから燃え尽きるまで、実に永い時間がかかるものだ。屋根や柱と共にその家の歴史も共に炎上しているのだ。
しらじらと夜が明けて来る。
私たちは、まちはずれの焼け残った国民学校に子供を背負って行き、その二階の教室に休ませてもらった。

子供たちも、そろそろ眼をさます。眼をさますとは言っても、上の女の子の眼は、ふさがったままだ。手さぐりで教壇に這（は）い上ったりなんかしている。自分の身の上の変化には、いっさい留意していない様子だ。

私は妻と子を教室に置いて、私たちの家がどうなっているかを見とどけに出かけた。道の両側の家がまだ燃えているので、熱いやら、けむいやら、道を歩くのがひどく苦痛であったが、さまざまに道をかえて、たいへんな廻り道をしてどうやら家の町内に近寄る事が出来た。残っていたら、どんなにうれしいだろう。いや、しかし、絶対にそんな事は無いんだ。希望を抱い

てはいけない、と自分の心に言いつけても、それでも、もしかすると、と万一を願う気持が頭をもたげてどう仕様も無かった。家の黒い板塀が見えた。

や、残っている。

しかし、板塀だけであった。中の屋敷は全滅している。焼跡に義妹が、顔を真黒にして立っている。

「兄さん、子供たちは？」

「無事だ。」

「どこにいるの？」

「学校だ。」

「おにぎりあるわよ。ただもう夢中で歩いて、食料を

もらって来たわ。」

「ありがとう。」

「元気を出しましょうよ。あのね、ほら、土の中に埋めて置いたものね、あれは、たいてい大丈夫らしいわ。あれだけ残ったら、もう当分は、不自由しないですむわよ。」

「もっと、埋めて置けばよかったね。」

「いいわよ。あれだけあったら、これからどこへお世話になるにしたって大威張りだわ。上成績よ。私はこれから食料を持って学校へ行って来ますから、兄さんはここで休んでいらっしゃい。はい、これはおむすび。

たくさん召し上れ。」
　女の二十七、八は、男の四十いやそれ以上に老成している一面を持っている。なかなか、たのもしく落ちついていた。三十七になっても、さっぱりだめな義兄は、それから板塀の一部を剝いで、裏の畑の上に敷き、その上にどっかとあぐらを搔いて坐り、義妹の置いて行ったおにぎりを頰張った。まったく無能無策である。しかし私は、馬鹿というのか、のんきというのか、自分たちの家族のこれからの身の振り方に就いては殆ど何も考えぬのである。ただ一つ気になるのは、上の女の子の眼病に就いてだけであった。これからいった

い、どんな手当をすればいいのか。
やがて妻が下の子を背負い、義妹が上の女の子の手をひいて焼跡にやって来た。
「歩いて来たのか？」
と私はうつむいている女の子に尋ねた。
「うん、」と首肯(うなず)く。
「そうか、偉いね。よくここまで、あんよが出来たね。お家は、焼けちゃったよ。」
「うん、」と首肯く。
「医者も焼けちゃったろうし、こいつの眼には困ったものだね。」

と私は妻に向って言った。
「けさ洗ってもらいましたけど。」
「どこで？」
「学校にお医者が出張してまいりましたから。」
「そいつあ、よかった。」
「いいえ、でも、看護婦さんがほんの申しわけみたいに、――」
「そうか。」
その日は、甲府市の郊外にある義妹の学友というひとのお家で休ませてもらう事にした。焼跡の穴から掘り出した食料やお鍋(なべ)などを、みんなでそのお家に運ん

だ。私は笑いながら、ズボンのポケットから懐中時計を出して、

「これが残った。机の上にあったから、家を出る時にポケットにねじ込んで走ったのだ。」

それは、海軍の義弟の時計であったが、私が前から借りて私の机の上に置いていたものなのだ。

「よかったわね。」と義妹も笑い、「兄さんにしちゃ大手柄じゃないの。おかげで、うちの財産が一つ殖（ふ）えたわ。」

「そうだろう？」と私は少し得意みたいな気持になり、

「時計が無いとね、何かと不便なものだからね。ほら、

お時計だよ、」と言って、上の女の子の手にその懐中時計を握らせ、「耳にあててごらん、カチカチ言ってるだろう？　このとおり、めくらの子のおもちゃにもなる。」

　子供は時計を耳に押しあて、首をかしげてじっとしていたが、やがて、ぽろりと落した。カチャンと澄んだ音がして、ガラスがこまかくこわれた。もはや修繕(しゅうぜん)の仕様も無い。時計のガラスなんか、どこにも売ってやしない。

「なんだ、もう駄目か。」

　私は、がっかりした。

「ばかねえ。」と義妹は低くひとりごとのように言い、けれども、その唯一といっていいくらいの財産が一瞬にして失われた事を、さして気にも留めていない様子だったので、私は少しほっとした。

そのお家の庭の隅（すみ）で炊事（すいじ）をして、その夕方、六畳間でみんな早寝という事になり、けれども妻も義妹もひどく疲れていながらなかなか眠れぬ様子で、何かと身の振方などに就いて小声で相談している。

「なに、心配する事はないよ。みんなで、おれの生れ故郷へ行くさ。何とかなるよ。」

妻も妹も沈黙した。私のどんな意見も、この二人に

は、前からあまり信用されていないのである。二人は、めいめい他の事を考えているらしく、何とも答えない。
「やっぱりどうも、おれは信用が無いようだな。」と私は苦笑して、「けれども、たのむから、こんどだけは、おれの言うとおりにしてくれ。」
妹は暗闇の中で、クスクス笑った。そんなにおっしゃってもと、いうような気持らしい。そうして、すぐまた他の事に就いて妻とひそひそ相談をはじめる。
「それじゃまあ勝手にするさ。」と私も笑いながら言い、「どうも、おれは信用が無いので困る。」
「そりゃそうよ。」と妻は突然、あらたまったような口

調で言い、「父さんは、いつでも本気なのか冗談なのかわからないような非常識な事ばかりおっしゃるんだもの。信用の無いのは当り前よ。こんなになっても、きっとお酒の事ばかり考えていらっしゃるんだから。」

「まさか、それほどでもなかろう。」

「でも、今晩だって、お酒があったら、お飲みになるでしょう。」

「そりゃ、飲む、かも知れない。」

とにかく、このお家にもこれ以上ご厄介（やっかい）をかけてはいけない、明日、また他の家を捜そうという事に二人の相談はまとまった様子で、翌（あく）る日、れいの穴から掘

り出した品々を大八車（だいはちぐるま）に積んで、妹のべつの知人のところへ行った。そこのお家は、かなり広く、五十歳くらいの御主人は、なかなかの人格者のように見受けられた。私たちは奥の十畳間を貸していただく事が出来た。病院も、見つけた。

県立病院が焼けて、それが郊外の或る焼け残った建築物に移転して来たという事を、そのお家の奥さんから聞いたので、私と妻は子供をひとりずつ背負ってすぐに出かけた。桑畑のあいだを通って近道をすると、十分間くらいで行ける山の裾（すそ）にその間に合せの県立病院があった。

眼科のお医者は女医であった。

「この女の子のほうは、てんで眼があかないので困ります。田舎のほうに転出しようかとも考えているのですが、永い汽車旅行のあいだに悪化してしまうといけませんし、とにかくこの子の眼がよくならなければ私たちはどこへも行けない状態で、ほんとに困ってしまって。」などと私は汗を拭きながら、しきりに病状を訴え、女医の手当のわずかでも懇切ならん事を策した。

女医は気軽に、

「なに、すぐ眼があくでしょう。」

「そうでしょうか。」

「眼球は何ともなっていませんからね、まあ、もう四、五日も通(かよ)ったら、旅行も出来るようになるでしょう。」

「注射のようなものは、」と妻は横合から口を出して、

「ございませんでしょうか。」

「あるには、ありますけど。」

「ぜひ、どうか、お願い致します。」と妻は慇懃(いんぎん)にお辞儀をした。

　注射がきいたのか、どうか、或(ある)いは自然に治る時機になっていたのか、その病院にかよって二日目の午後に眼があいた。

　私はただやたらに、よかった、よかったを連発し、

そうして早速、家の焼跡を見せにつれて行った。
「ね、お家が焼けちゃったろう？」
「ああ、焼けたね。」と子供は微笑している。
「兎（うさぎ）さんも、お靴も、小田桐（おだぎり）さんのところも、茅野（ちの）さんのところも、みんな焼けちゃったんだよ。」
「ああ、みんな焼けちゃったね。」と言って、やはり微笑している。

底本：「太宰治全集8」ちくま文庫、筑摩書房
1989（平成元）年4月25日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月
入力：柴田卓治
校正：ゆうこ
2000年3月21日公開
2005年11月4日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。